



2025 年

5 月 第 1・2 週 の 主 日 礼 拝 説 教 要 約

・ 5 月 4 日 ヨハネ福音書 21 : 20 - 25 .

『 久遠の信仰 』

・ 5 月 11 日 ルカ福音書 7 : 11 - 17 .

『 悲嘆無用 』

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

私の来る時まで“彼が”生きていることを、私が望んだとしても、あなたに何の関係があるか。あなたは私に従いなさい。

(ヨハネ福音書 21 : 22 b)

「あなた」が明確にペトロであること、さらにこの“彼”こそが、所謂“ヨハネ福音書”の著者であることを、この箇所は仄めかしています。それ以上でも以下でもないのか、その重要性の有無についてはよく分かりません。教会暦としては復活節の箇所です。

ヨハネ福音書にのみ記載されている内容です。他の福音書では、承伝は知りつつも割愛しても構わないという判断が働いたのかもしれませんが。

この時、他の弟子たちは“彼(ヨハネ?)”が、イエスが再び来られる時まで生き残るのかもしれないと考えたとあります。

ヨハネ福音書が記されたのが推定1世紀後半(末頃?)だとすると、もしかしたら生前のイエスの、最後の目撃者がまだ何人か、生存していた時代です。その中の一人がイエスの関係者(彼?)だったのかもしれませんが、その鮮明な記憶をもって、関係者の扱いをうけたのかもしれませんが。

ただ、最後まで期待されていたイエスの“再臨”を待たず、未練を残しつつ第四の福音書はその編集を終えます。

私の心は多くの知恵と知識を見定めた。知恵を一心に知ろうとし、また、無知と愚かさを知ろうとしたが、これもまた風を追うようなことだと悟った。知恵が深まれば、悩みも深まり、知恵が増せば、痛みも増す。(コヘレトの言葉 1 : 16 c-18)

人間の認知度(?)の限界が、語られる聖書箇所です。人間には分からないこと(の方)が多くあることがよく示されています。イエス・キリストの情報が事前に記されているはずの旧約聖書をいくら読んでも、この方の“受難”、“復活”、“昇天”、“再臨”、に関する満足のゆく知識を得ることは容易ではありません。引用文の著者(コヘレト)の想念の深さ

かどれ程のものだったかも知れないことが多すぎます。

福音書の著者たちもこれと同じで、その記述の最終段階では、多くの謎に直面しつつ筆を擱いています。

十字架上のイエスが、そばにいた“愛する弟子”に向かって、

見なさい。(この女性が)あなたの母です。

(ヨハネ福音書 19 : 27 b)

と言った時のこの女性とは、イエスの母のマリアのことでした。指名されたイエスの“愛する弟子”は、この後、「イエスの母を自分の家に引き取った」とあります。この事実と、使徒言行録の 1 章 14 節にあるエルサレムの家(宿泊所)の関係は…

彼らは皆、女たちやイエスの母マリア、またイエスの兄弟たちと心を合わせて、ひたすら祈りをしていた。(使徒言行録 1 : 14)

とありますが、この時の“彼ら”の中にヨハネがいたことが、前節(13 節)の宿泊者のメンバーの中に記されています。

エルサレムに発足したと思われる原始キリスト教会本部と、愛する弟子(ヨハネ?)の“家”との関係は不明です。イエスの母マリアはどちらに居住したのか、それとも、ある一つの家が提供され、共同生活の場として立ち上がったのか(使徒言行録 2 : 44 節以下)、教会史の原点もそこにあります。

そもそも、このヨハネはガリラヤ湖の漁師のゼベダイの息子で、母の名はサロメ、もしかしたら、イエスの母の姉妹です。だとするとその子のヤコブとヨハネはイエスの従兄弟になります。イエスが彼らのことを気軽に“ボアネルゲス”すなわち「雷の子」と名付けたのも、こうした関係があったからなのかもしれません。彼らの家は、ガリラヤ湖畔にあります。ナザレに住むイエスの母を呼び寄せて同居するのに、さほどの支障はなさそうです。いずれにしても、彼らがどのようにして“久遠の信仰”の礎を築いていったのかは、謎だらけです。

ガリラヤのカナとナザレとナインは北から南へと、ほぼ等距離に並んでいます。ただこのナインという地名は、旧新約聖書の中で、唯一、ここだけに出てきます。イエスの一行が、その町の城門近くに差し掛かると、ちょうどそこから出てくる葬列と出会います。列の中には悲嘆に暮れる故人の母親らしき人物がいます。どうやら彼女は大切な一人息子を失った寡婦のようです。古今東西、女性よりも男性の方が短命であることに変わりはありませんが、母親よりも息子が先に召されるとなると、こうしたケースは（戦死を除き）けっして多くはありません。息子が怪我人ならば、良きサマリア人のように立ち止り、見て見ぬふりをせず、介抱することもできますが、死者の棺を前にして、打つ手はありません。一礼をして通り過ぎる他はありません。イエスは、その母親を憐れみます。しかし、それだけでは終わりません。良きサマリア人さえも手に負えない、嘆き悲しむ女性をそのまま放置して立ち去るわけにはいかないのです。

主はこの母親を見て、憐れに思い、「もう泣かなくてもよい」と言われた。そして、近寄って棺に触れられると、担いでいた人たちは立ち止まった。イエスは、「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と言われた。すると、その死人は起き上がってものを言い始めた。イエスは息子を母親にお渡しになった。（ルカ福音書7：13 - 15）

歴史の中に埋没してもおかしくないこの町に、神の救いが訪れた瞬間です。夫を喪い、息子に先立たれたこの女性は、後のイエスの母マリアと全く同じ喪失感を味わっていたのです。しかし、神が、死んだ息子を甦らせるという奇跡を通して、両者は信仰により大いなる恵みと喜びを味わうこととなるのです。

両者は定めにより、不幸な立場を押し付けられ、辛うじてそこから難を逃れるという陰鬱なる運命を生きたのでしょうか。いや、おそらくそうではなく、悲惨な運命そのものを、日々新たなる神との出会いによって乗り越えることができたのです。